

まめとはなにか

ようこ

豆をテーマにした作品を書くという課題が出た。毎回いろんなモチーフを使用して執筆するけれど、今回の課題は「豆を使って短編小説を書く」というものになった。このクラスが始まったとき、先生は学生に対して、どのように小説を書きはじめ

めるかというアンケートをとった。一番多かったのは、私のようにお題から連想するという回答だった。例えば今回のテーマでいくと、「小豆」「節分」「大豆」「畑の肉」のように『まめ』という言葉から連想されるものをリストにして、そこからアイデアを得るといふ、至極一般的なものだ。

他にいたのは、設定を考える（登場人物）などだけど、私が一番驚いた回答と実際にそれをやつ

ている人がいた。それは、他言語に訳してから考
える、というものだ。最初聞いたときには何の冗
談かと思っていたけれど、現実はそのクラスメイ
トはそうやって執筆をしているし、中身も秀逸で
面白い作品が多い。ある意味、私がやっているブ
レストと似ているのかもしれないが、それでも他
の言語の響きや語源から構想を得るなんて器用
なこと出来ない。やろうとも思わない。英語やフ

フランス語程度だったらついていけるけれど、たまにそれは何語なんだ？ という響きの言葉を使っていることがある。唯一無二の執筆方法だと思う。たまには気分を変えてみようかと思つて、英語に訳したり、外国でよく食べられる豆料理なんかを調べてみた。英訳だと、「ビーンズ」すごく単純だ。コーヒー豆なんか、外国産の豆としては身近にあるものかもしれない。料理だと、「チリ」

と呼ばれる煮込み料理があることを知った。あるときお世話になっていた人がよく調理してくれたものだ。大豆だけじゃなくて、紫色の大きめの豆やコーンを一緒に煮込んだ料理、最初は独特な味で苦手だったけれど、食べていくうちに一番の好物になっていた。

さあ、アイディアを一通り出してまとめたところで、執筆を始めよう。まずは……。

マメな人

青

休日はコーヒー豆をひきながら、手紙を書いて
いるという彼は、まめに面倒を見てくれる友達に
宛てた文をこまめに辞典を引いてはああでもな
いこうでもないとうんうん唸りながら書いてい
るらしい。ちなみに、そんな彼の右手の中指には

大きなマメがある。

彼は周囲から、豆、豆の人、マメくん、マメつちなどなど、とにかくマメづくしのあだ名で呼ばれている。ちなみに彼の名前は全くマメにかすつていない。

本人は「豆はそんなに好きじゃないんだけどな」と呼び名に対して首を傾げているが、そういうこ

とではないんだな。

嬉しいことや驚くことがあれば炒った豆のようにはじけ、悲しくなると背中を丸めてそれはそれは、さやをひらいた中の豆みたいに小さくなる。見ていて飽きない人だと思う。

彼は交友関係が広く、誰とでもすぐに仲良くなる。近くにいても、遠くにいても、関係ないと

ばかりに巻き込んで、友達を作る。

いつの間にか近くの支柱に巻き付いて自分のものだと言張するうちの庭のつるまめみたいだ。

そんなマメの申し子の彼が今、私の足元で顔を覆って蹲っている。残念ながら、私の位置からは彼の手のマメは見えない。

今日の彼は青紫色のコートを着ていて、頭の中

に要素液に浸されたシャーレの上のインゲン豆が浮かんだ。確か小学校の理科の時間だ。あの実験、理由はわからないけど好きだったな。

小学生よりもずっと低い位置の頭をうんうんと唸りながら揺らし、彼は私の言葉を待っている。私はさつき、彼に告白をされた。実にまめやかな言葉だった。

「私、豆、好きなんだよね」
ば、と効果音が出るくらいに彼が頭を上げた。目
が合つて、互いに笑みが出る。

あ、発芽。

……なんて、きつと茹でた小豆よりも熱くて赤
い顔をしてるだろうと私はぼんやり思った。

気がつけば私の左手指先には、彼のつるがしつかりとまきついていて、彼のマメの大きさを確かに感じたのだった。